

作文で表現力を高めるための副教材の考案 ——タイの大学生のインタビュー調査から——

鹿目 葉子

1. はじめに

本研究の対象であるタイの日本語専攻の大学では、3年から作文の授業があり筆者は3年の後期（11月～2月）から作文の授業を担当した。授業開始前に作文について質問をしたところ、自分の考えを自分の言葉で表現する仕方と構成方法がいまだにわからないという現状にあることがわかった。作文は、思考力というものが大きく関係しており（高橋 2001）、考える習慣がある留学生は読みの力も着実に伸び、作文においても独創的な文を書く力が付く（西隈 2009）といわれる。この「独創的な文を書く力」を独自の発想と考察にもとづいた表現力ととらえた場合、その表現力はどのように高めることができるのだろうか。石橋（2009）は、言語教育における学習効果の観点から学習者のストラテジーの把握が重要であると述べている。

そこで、対象者の現状の解決を問題意識とし、TQF:Hed⁽¹⁾および作文に関する先行研究から得られた要件を考慮して作文の授業を組み立て、作文の授業および作文を書くためのストラテジーについてインタビューを実施した。その結果、作文の授業における改善点および対象者が作文を書くために養わなければならない点が明確となった。筆者は前述の諸点をさらに分析し、作文における表現力を高めるための副教材シートの作成を試みた。本シートは授業内および授業外で使えるように久保田（2003）の構成主義や梅田（2005）の自律学習の考えも参考に作成した。

2. 先行研究

作文はその人の思考力というものが大きく関係しているため（高橋 2001）、作文に関して論理的思考力を育むための研究が数多くなされている。西隈（2009）は論理的思考力を「発想力」、「読解力」、「表現力」の3つに分け、「表現力」を発想力と読解力から得た力をもとに自分独自の意見や主張を述べる力と定義している。「自分独自の意見や主張を述べる力」を「自分独自の意見や主張を書く力」と言い換えた場合、「書く」力をつけるためにはどうしたらいいのだろうか。佐野（2007）は、Bachman（1990）のモデル⁽²⁾を枠組みに1）統語文法、語彙、つづりなどの文法能力、2）読み手の文化で好まれる文章構造にそって首尾一貫した文章を構成する能力、3）読み手に書き手の意向を明確に伝える語用論的能力、4）読み手がだれであるかによってことばを使い分ける社会言語学的能力、の4つの構成要素をあげ、読み手がだれであるかを念頭において案と構成を練って書き上げるという認知的言語行動が「書く」力（ライティング力）だと説明している。

では、認知的言語行動である「書く」力をつけるための指導法にはどのようなものがあるのだ

ろうか。喜屋武 (2006) は、その指導法として Raimés (1983)^③の「フリーライティング・アプローチ」、「コミュニケーション・アプローチ」他4つのアプローチを紹介しているが、実際に授業に取り入れるために生徒の実態や習熟度によって適切な指導法を見極めながら指導計画を立てることが大切であるとし、「書きたい」という思いを喚起させてまとまった文を書くことに慣れさせることが大切であると述べている。

上記の緒論から、作文の授業には語彙および文法、構合力、語用論的能力、社会言語学的能力、トピックへの興味や思考力を考慮したコンテンツが求められ、学習者に適した指導法の選択が必要であることがわかる。

3. シラバスの作成および授業展開

3.1 シラバスの作成における条件

本研究の対象校における各科目のシラバスは TQF:HEd に基づいて作成される。そこで、後期の作文の授業もそれに基づき、①日本語で自分の考えや意見を表現できる、②学習した文法や語彙を使用して作文が書ける、③構成を考えて作文が書ける、を目標とし、時事問題を含む多方面にわたる分野からトピックを与え、ディスカッションやインターネット等を利用した各トピックの情報収集方法について教えながら授業を展開する。

3.2 教案作成における条件

前節 3.1 のシラバスおよび以下の条件をもとに教案を作成する。まず、トピックは「書きたい」という思いを喚起させるため学生にとって身近な話題を選択し、論理的思考力をつけるために時事問題等もととりあげる。各トピックで使用する語彙は富岡 (1988)および富岡・小笠原他(1988)の中から中級レベルに相当する語彙を選択し、文法はそれらの中で提示されている文法を使用する。

また、「発想力」を養うためのコンテンツとして Mapping^④を使用する。喜屋武 (2006) は、Mapping を授業に取り入れることで、生徒自身がもっている情報を語の関連づけで連想しながら書いていくので楽しみながら取り組める等の多くの利点をあげ、Mapping を利用することで表現力を高めることができると述べている。指導法については、文法などの多少の誤りを気にせず文をたくさん書き、慣れることで自分の思いや考えを自由に書く表現力が高まる (喜屋武 2006) という考えから、Raimés (1983) の「フリーライティング・アプローチ」を導入する。

3.3 授業フローについて

対象校における1コマの時間数は3時間である。時間の配分を考慮し、授業を6つのステップに分けて展開する (表1)。時間の配分は15分の休憩時間および5分の出欠席の確認時間を除いて表示してある。また、ステップ6はステップ2およびステップ5をもとに構成を考えさせる。起承転結の枠組み (図1) をシート内に書いておき、学生に考えさせ書き込ませる。

表1 「授業フロー（1コマ分）」

	内容	目的
ステップ 1 10分	Q&Aを通してトピックを紹介 ・授業の導入として使用	何について書くのかを自分で想像する力を養う
ステップ 2 35分	Mapping ・トピックに関連する語彙を使用	トピックに関連する語彙を想像させ、産出させる
ステップ 3 15分	トピックに関する語彙の導入 ・各トピック 8つまでとする	新出語彙を導入することで、語彙量を増やす
ステップ 4 25分	トピックに関する文法の導入および文法を使用した文の作成問題 ・既習および未習の文法	既習の文法は復習となり、文を作成するにあたり文法の使い方がわかる
ステップ 5 50分	作文のヒント ・12ヒントを目安とする ・状況やトピックに応じてディスカッションも取り入れる	作文が苦手な学生に書くためのヒントとなる 各学生がヒントを参考に自分の考えを表現することができる
ステップ 6 25分	構成を考えさせる 情報収集方法（インターネットのweb ページ等を教える）	起承転結に何を書いたらいいのかわからせ、自分で考え、構成する力を養う 情報の探し方を学ぶ

5. 構成を考えよう！何を書きますか。

(起)	(転)
(承)	(結)

図1 「起承転結の枠組み」

4. 研究調査

4.1 調査の目的

本研究の目的は、対象者が作文を書くためにどのようなストラテジーを利用しているのかを明らかにすることである。また、作文の授業における改善点および対象者が作文を書くために養わなければならない点を明確にし、表現力を高めるための副教材シートを作成することである。

4.2 調査の概要

4.2.1 調査対象

本研究における対象者は、タイの日本語専攻の3年生10名である。この10名は、後期授業開始前のオリエンテーション、中間テストおよび期末テストを除く12回の作文の授業において最高点の評価⁽⁵⁾を6回以上得た学生である。

4.2.2 調査期間

調査期間は、2010年11月上旬から2011年2月下旬までとする。

4.2.3 調査方法

半構造化インタビューを用いる。

4.3 調査内容

質問事項は4つである。1) 言葉の意味や文法の使い方が理解できない時の対処法、2) 作文を書く手順や方法、3) 今回の作文の授業について、4) 独創的な作文（自分の意見や主張）を書くために必要なこと、である。1) および2) から語彙の意味や文法の使い方を理解するためのストラテジーと作文を書くためのストラテジーを分析する。また、その分析結果、3) および4) から副教材シートの作成に必要な条件をさぐる。

4.4 分析と考察

1) のインタビューの結果から、対象者は「電子辞書を利用する」、「インターネットを利用す

る」等複数のストラテジーを組み合わせ言葉の意味や文法の使い方を理解しており、「ノートに何度も書いて覚える」、「他の作文で使ってみる」等の方法で言葉を記憶していた。

2) のインタビューの結果から、「今の実力をためすために日本語で考え、日本語で書く」、「時間を短縮するためにタイ語で考え、日本語で書く」等の手順を使い、「Mapping や授業内での作文のヒントを利用する」、「一つ一つの言葉におけるタイ語と日本語の意味を何度も考えてから、一番いい表現をさがす」等の方法を用いていた。

つまり、対象者は時間的要因を考慮し、作文を「考えを繰り返す場」および「習得した物を試す場」と捉え、授業内で学習した内容を参考にしながら独自のスタイルを用いたり言語の背景にある文化を意識したりして作文を書いていることがわかる。

3) のインタビューの結果をまとめると、対象者全員が楽しみながら学習できることから Mapping を導入したことに好意的な考えを持っており、短文作成や作文のヒントも有効的であると述べていた。また、構成を考えることに関しては、起承転結の「転」に何を書いたらいいのかわからないという意見と枠組みを学習したことで作文が書きやすくなったという意見があった。さらに、学生主体のトピック選択やディスカッションの時間数の増加について要望があった。

4) のインタビューの結果をまとめると、対象者は独創的な作文を書くために構成力を重視しており、ディスカッション等を用いて他人の意見を聞き客観性を身につけることやトピックから考える力を養うことが大切であると考えている。また、独創的な作文を書くために対象者自身、語彙力、想像力が不足していることを認識しており、諸力の強化が必要であると思われる。

5. 副教材シートの考案

5.1 副教材シートの条件：緒論の観点から

久保田 (2003) は、「構成主義の教育において、対話は新たな意味を生成する思考装置としての役割を担う。ひとり一人が主体的にあらゆることに参加し、互いに違いがあっても尊重しあう関係がごく自然に作られ、相互に学びあったり、協同して何かを作ったりすることが「ほんとうの学び」につながる。」と述べている。つまり、ディスカッション等のグループ活動を通してお互いの考えを交換することで、さらに作文を書くための表現力が養われると考えられることからディスカッションのためのシート作成が必要である。

また、梅田 (2005) は日本語を手段として有効に使えるようになるために自律学習の必要性を述べている。梅田は自律学習を、学習者自身が自己の学習に主体的に関わり学習を孤立化せず教授者や教材や教育機関等といったリソースを利用して行う学習と定義している。この理論から作文は日本語を手段とする学問であり、それを有効に使う自分の考えや主張を書くために自律学習が必要であると考えられる。そして、学習者が自己の学習に主体的に関わるためには各学習者の多様化した価値観、思考、意思などに応じるコンテンツを教材作成の条件とする必要がある。

5.2 副教材シートの条件：検証と考察から

前章 4.4 から、作文の授業の良かった点と改善点および強化すべき諸力を作成条件とし、学習者自身で作成するシートであることも条件に入れる。条件は下記のとおりである。

- ①ポートフォリオスタイルの導入：授業の記録をいつでも振り返ることができるようにする。
- ②作文の授業で良かった点：対象者が好意的であった Mapping および構成の枠組みを入れる。
- ③作文の授業での改善点：構成主義の考えからディスカッションを入れ、自律学習の立場から 3 回に 1 回の割合で学生にトピックを選択させ、想像力および考察力を高める。
- ④強化すべき諸力による条件：想像力・語彙力・考察力を高めるコンテンツを導入する。

5.3 副教材シートの紹介

前節 5.1 および 5.2 から副教材シートを作成した(図 2)。各項目の内容は以下のとおりである。

図 2 「副教材用シート」

- ①語彙力・想像力の育成：マッピング。
- ②構成力・語彙力・考察力の育成：絵、文等を用いて起承転結を自分で考え、説明文をその横に書く。
- ③客観性の確保：4 名⁽⁶⁾の友達に説明をして友達からのコメントを書く。
- ④考察力の育成：コメントをもとに、もう一度構成を自分で考える。
- ⑤自律学習：作文に関する文法、語彙等を自分で調べたり、情報を書き込める欄とする。

6. まとめと今後の課題

本研究は、授業開始前の作文についての質問から、自分の考えを自分の言葉で表現する仕方と構成方法がいまだにわからないという現状を問題提起としてはじめられた。問題の解決にあたり授業を構成および展開し半構造化インタビューを行った結果、構成力はいったが独創的な作文を書くための語彙力、想像力、考察力の不足が顕著となり、授業内で使用する教材の見直しが必要となった。そこで、本研究における副教材シートの作成を試みた。本シートは、作文の授業の改

善点から構成主義の考えおよび自律学習の立場を考慮に入れ、作文の授業の良かった点および強化すべき諸力を高めることを目標に作られている。筆者は、これから本シートを使用してその効果の調査と改善をし、学習者が作文で表現力を高められるようさらに研究をしていきたい。

注

- (1) Thai Qualifications Framework for Higher Education の略である。道德教育、知識を身につける教育等、高等教育で必要とされる教育面に関するフレームワークである。
- (2) Components of language competence のことで、言語能力の構成要素の説明によく引用される。
- (3) Raimes の指導法には他に「制限作文から自由作文への段階的アプローチ」「パラグラフ・パターン・アプローチ」「文法・統語・構成アプローチ」「プロセス・アプローチ」がある。
- (4) トニー・ブザンが開発した様々な脳の力を一瞬にして引き出す思考技術のことである。
- (5) 本校の作文は文法面、構成面、内容面から評価をしている。各面はA、B、Cの3段階にわけられており3つの面のうち2つ以上Aを得た場合、総合評価をAとする。
- (6) 本校の1クラスの人数および教室の広さから1グループ5名が妥当であると判断する。

参考文献

- 石橋玲子 (2007) 「日本語学習者の作文の誤用への気づきと修正」『日本語教育紀要』第7号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp11-20
- 梅田康子 (2005) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割—学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る—」『言語と文化』第12号、愛知大学、pp59-78
- 久保田賢一 (2003) 「構成主義が投げかける新しい教育」『コンピュータ&エデュケーション』vol.15、コンピュータ利用教育学会、pp12-18
- 富岡純子 (1988) 『日本語作文Ⅰ—身近なトピックによる表現練習—』、株式会社専門教育出版
- 富岡・小笠原他 (1988) 『日本語作文Ⅱ—中級後期から上級までの作文と論文作法—』、株式会社専門教育出版
- 西隈俊哉 (2009) 『大学・大学院留学生のためのやさしい論理的思考トレーニング』、株式会社アルク
- 佐野富士子 「三省堂高校英語教育」、株式会社三省堂
- 〈http://tb.sanseido.co.jp/english/h-english/pr/07_summer/07-summer_02.pdf〉 2011年2月10日
- 喜屋武真弓 那覇市立教育研究所 「平成19年度研究報告書」
- 〈http://www.nahaken-okn.ed.jp/naha-c/ken_pdf/ken_indexH17-19.html〉 2011年2月20日
- 高橋俊之 SCHOOL OF 未来図 「THE21 Business Column」
- 〈<http://www.miraizu.jp/>〉 2011年2月20日